

まず、ヒシヤトチカガミが多くなったのは主として(二)がこれらの植物にとって都合がよい要因になっているからであり、(三)もそれを助けることになっていると考えてよさそうです。またヒメガマについても同じようなことが言えるのではないかと考えられます。

次にA点にあったものが著しく減少または消滅し、B点で多く見られるようになったのは、(三)によるところが大きいようです。すなわちA点はその工事(四十年ころ行われたらしい)の前は浅くて流れも少しはあるようになり、B点はもとアシが生い茂っていた湿地であり、新しく水面になった所だからです。

ハゴロモがふえているのは、この植物が北アメリカ原産の帰化植物であることから、三十四年当時は土浦附近にはいつて来てまだ間もない頃であったと考えてよいでしょう。また、この植物は(一)や(二)に対してはかなり抵抗力が強いと言えますが、昨年の夏霞ヶ浦でアオコが異常発生した時に、葉がどろどろに溶けたようになっただけで、今後は桜川や霞ヶ浦の汚濁がさら

にひどくなれば減少して行くものと考えられます。

全く見られなくなってしまう植物としては(二)またイバラモがあり、その原因はアサザについては(二)または(三)、イバラモについては(二)または(一)が考えられます。霞ヶ浦全体を見た場合、アサザはまだ各地で見られますが、イバラモは南端の方の限られた範囲で少し見られるだけで、明らかに減衰の道をたどっています。このほか霞ヶ浦にはジャクモとその仲間が三〜四種類あり、そのうち一〜二種類またはそれ以上が、イバラモと同じような状態になっていることがほぼ確実です。川や湖の汚染あるいは汚濁が植物にもいろいろな影響を与えることは疑門の余地がなく、種類によっては絶滅の運命をたどるようになることも確実と言えます。人間にとって直接必要はないにしても、何種類かの植物が環境の悪化によって消失するとならば、誠に由々しい。悲しむべきことと言わなければなりません。そのようなことにならないうちに、それらの植物を守ってやりたいものです。

△江戸崎西高教諭▽